

(左から) 内村鑑三、吉田富三、新渡戸稲造



# がん患者を癒す

医療ジャーナリスト  
青木直美

## 「哲学」と「対話」

### 『あなたの人生をお孫さんへのギフトに』

### ベテラン医師による「言葉の処方箋」

最近、「がん哲学外来」が、がんの患者やその家族たちの間で注目を集めている。

外来といっても、病院の専門外来とは異なるもので、医師による予約制の個人面談だ。一回三十分〜一時間。費用は無料。診断や治療を行うわけではないので、診察券も必要ない。通常の診療では患者が医師の説明を聞くのが普通だが、「がん哲学外来」は医師と患者が「対話」をするのが特徴だ。

この「がん哲学外来」を

(左から) 矢内原忠雄、南原繁

はじめたのは順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授で一般社団法人がん哲学外来理事長の樋野興夫医師。

「医師には、『最先端の治療を行う』ことと患者さんに安心してもらうために『人間として手を差し伸べて患者さんを支える』という二つの使命があります。しかし、二人に一人ががんに罹る時代で患者さんが溢れる中、後者はなかなか難しくなっています。治療に携わる医師は、気持ちがあっても、患者さん一人一人に十分な診療の時間を取れない。

その一方で、がんの患者さんは、治療だけでなく、心の安定を求めている。必要な情報提供を受け、話を聞いてもらうことも大事ですが、それだけでは満たされない部分がある。そこをすくい取ろうと立ち上げたのが「がん哲学外来」です。厳つい名前が付いていますが、堅苦しさも、白衣もパソコンもなし。フェイス・ツー・フェイスで患者や家族の悩みを聞き、同じ視線で対話をする場です。人は傾聴だけでは心が休まらない。対話によって慰めら

れるのです」(樋野医師)

がん患者を慰める「対話」とはどのようなものなのか。「がん哲学外来」の現場に同席させてもらった。その日、やや硬い表情で現れたのは、独り暮らしをする七十五歳の小柄な女性だった。黒いロングブーツを履き、グレーのセッタア

「がん患者は様々なことに悩み、精神的に不安定になることも多い。それを解消するための場、「がん哲学外来」が最近広がりを見せている。ここは医師が「説明」をするのではなく、患者と「対話」するのが特徴だ。提唱者の医師にその理念を聞き、実践の様子を取材した。

ツプをお洒落に着こなす姿は、実年齢より若く見える。ゆったりとソファに腰掛けて迎えた樋野医師は、濃紺のスーツ姿。「どうぞ」と、向かいの来客用ソファへ座るよう促すと、テーブルにはコーヒーとお菓子が用意された。簡単な自己紹介を終え、女性はためらい交じりにこう切り出した。

「去年の秋に急にほとんど

提唱者の順天堂大学(右)・樋野教授

尿が出なくなり緊急手術で尿管にステントを入れたんです。その後、子宮頸がんが見つかって……。放射線治療と抗がん剤治療のため二カ月入院しました。退院前に、今度は肺に血栓があるとと言われて……。今、病気を三つ抱えているんです」

続けて、夫を早くに亡くし、病気をして改めて感じたパートナーの存在と人の支えのありがたき、見るからに病人のように生きたくないという気持ち、医者になりたいたいという中学生の孫への想いなどを、脈絡なくぼつりぼつりと口にした。

その一つ一つに樋野医師は、柔和な表情で相づちを打ち、「今はご家族と一緒に住んでいるの?」「そこには、学校の先生を対象にした講演で呼ばれて、僕も行ったよ」と、ときに全く違う話題に水を向けながら、やわらかい声で応じる。

樋野医師は時折、「うんうん、無頓着なほどに大胆に。自分を忘れるくらいがいいね」

「そうだね、人生の目的は品性の完成。自分の性格を

完成させることだから」

など、独特なフレーズを挟む。こうした言葉を樋野医師は、「言葉の処方箋」と呼んでいる。短いフレーズをたたみ掛けるように使うことで患者の耳に残り、ストリートに心に届くという。

会話が途切れると、互いが黙ってコーヒーを飲む。再び話し出し、沈黙が流れると、またコーヒーを飲む。

「病院のベッドの中で空を見ながら、自殺も考えました。せめて孫に医者への素晴らしさだけ伝えられればいいかなとか、樹海へ行こうか、鉄道では迷惑をかけるかなとか……。退院したら、少しそういう気持ちで薄れたんですけどね……」

対話の終盤、苦しい胸の内を吐露した女性に、樋野医師はこう語りかけた。

「あなたの人生をギフトにする。お孫さんに贈るんです。今度は一緒にここへ来ればいいじゃないですか。

自分の人生に期待ばかりするから失望に終わる。あなたには、人生から期待されている、ことに、気がついていないのかもしれない

よ。人間は誰にも、役割があるからね。それが何なのか探しに行くんですよ。

勝海舟の臨終の言葉を知っていますか? 「これでおしまい。若くして病気で亡くなった内村鑑三の娘の臨終の言葉は『もう行きませう。人間、最期は、この二つどちらを言うかだよ』」

女性に「人生から、期待される……自分の役割……」と、樋野医師の言葉をかみ締めるように頷きながら聞き入っていたが、話が終わるところ言った。

「これでおしまい」と言い切れるくらい、生きたいです。一年でもいいから元気になるって、やり残し

## 新渡戸稲造ら“先人五人”の影響

このように「がん哲学外来」の大きな特徴のひとつは、樋野医師による「言葉の処方箋」だ。

これらのほとんどは、樋野医師が読んできた書物から抜き出しているという。

特に、南原繁、吉田富三、新渡戸稲造、内村鑑三、矢内原忠雄を樋野医師は「先

霊芝ご愛飲の皆様へ、おトクなニュースです!

日本をはじめ、アメリカ・中国の州、国立大学でも  
研究用に採用された

## 高品質 飛驒霊芝

よいものだからこそ長く愛飲してほしい、そう考えたから、この価格が実現しました。三十年以上にわたる科学的な研究、栽培実績の成果を結集したのが「飛驒霊芝」です。その品質は国内・海外で高く評価され、研究用霊芝として採用されています。※「飛驒霊芝」は商標です。



1kg (102円) 30,000円  
500g 17,000円 (送料別)

だから長期愛飲者こそ、自信を持ってお勧めします。

ご注文  
お問合せ

<http://www.dai-yakusan.co.jp/>

飛驒霊芝 第一薬産 検索

☎0120-32-0963

※袋・きざみ・粉末等ご希望に応じます。  
※開封前、賞味7日間は返品可(送料料申込者負担)

第一薬産株式会社 〒506-0003 岐阜県高山市本母町59

本も読むようになった。

「就寝前に三十分、本を読む習慣を」と勧めたのもこの教師だという。新渡戸稲造と内村鑑三は、南原が「わが師」と仰いだ人物。南原の後任総長・矢内原忠雄も新渡戸と内村を尊敬していたと知り、興味を深めた。

「『がん哲学』は、南原繁の『政治哲学』と、日本を代表する病理医(がん研究会がん研究所所長)吉田富三の『がん学』を組み合わせて提唱したものです。『先人五人』の本をむさばるよう

に読むことで、僕は人間がいかに生きるべきかを学びました。十九歳からの読書習慣は、今でも続けています。

新渡戸は第一高等学校の校長時代に悩める学生のために学校の側にアパートを借り、週に一度集まりを開いていました。矢内原は胃がんで亡くなり夢を果たせませんでした。彼が悩める学生のために本郷通りにカフェを作りたいと思ったのも、新渡戸に倣ったこと。若き日に本を通じてこうした考え方に触れたことから、『がん哲学外来』を立ち上げ、『言葉の処方箋』が生まれたのです。

患者さんの発する言葉や様子から、今、その人に必要と思われる先人の言葉を、僕なりの解釈を加えて四、五つ伝えていきます。先人五人とのチーム医療で成り立っているようなものです。

また、新渡戸、内村、南原、矢内原の四人と樋野医師はクリスチャンでもあるため、対話には、聖書の言葉や、マルティン・ルーターなどの神学者や牧師の言葉を引用することも多い。

ただ樋野医師は、先人たちの言葉を教科書のように「これは誰々の言葉でね……」と伝えるのではな

く、さりげなく用いる。たとえば、先の女性に語った、

「人生の目的は、品性を完成するにあり」

は内村鑑三の言葉であり、聖書にも登場する考え方だ。

この言葉は「なぜ自分は病気になるってしまったのか」と悩む人や、「病気をしたこと、前と同じ仕事や、生活ができない」と今の自分を受け入れられずにい

## 「人生いばら道、されど宴会」

がん告知を受け、死の恐怖に苛まれてしまう人には、「人生いばら道、されど宴会」

「目下の急務は忍耐あるのみ」(日本の病理学の父・山極勝三郎)

などの言葉を使う。前者は、病気があっても日常に心の楽しみを持つことができるということ、後者は、今はあれこれ考えずに治療にだけ集中するべきということを意味している。

また、「ベッドに寝たきりで、外にも出られない」「入院生活で何もできず、家

る人にもよく使うという。

「人生の目的は、地位や名誉を得ることや、億万長者になることではなく、品性の完成にあります。目の前に懸念に耐え、周りの人に喜んでもらうこと

で、品性は磨かれます。品性を磨くことで、本当の希望が生まれるのです。そもそも、病気をする前の自分や生活が一番よかったとは限りません」(樋野医師)

族に迷惑をかけるだけの自分が苦しい」と嘆く人には、「病床にも知恵あり」

「otoko(何をするか) より もotoko(どうあるか)」(とも新渡戸稱造)

という言葉を贈る。「ベッドに寝ていて何もできなくても、本は読める。境遇にかかわらず、できることは必ずあるものです。入院中に、もしかすると、

これをするために病気になるのではないか」と思えるようなことに出会えた人も少なくありません。それに、たとえ何かをし

てもらうだけになったとしても、家族や見舞いに来てくれた友、看護師や医師にも、老いや病とは何か、生きる意味や死について、あなたの存在自体が教えてあげている。相手を笑顔にしたり、勇気づけたりすることとは、ベッドの上においてもできるのです」(樋野医師)

余命宣告を受け、絶望する人には、「勇ましく高尚なる生涯」(内村鑑三)

「希望を捨てずに頑張つて」と励まされることで周囲と信頼関係が壊れかけているときに、「あなたには、死ぬという大事な仕事が残っていますよ」と伝えることもある。

樋野医師によると、「言葉の処方箋」以外に、「がん哲学外来」の面談に欠かせないものが三つあるという。「暇げな風貌」に「お茶」、そして「偉大なるお節介(いいお節介)」。

「ここへ来るのは、人生に失望している人や、冷たい親族に悩む人などが多い。みんな、温かい他人」を求めているんです。相手が忙

しそうだと、心は開けないから、暇そうに見せて話しやすい状態を作る。それが『暇げな風貌』です。

また、再発した方や末期の方は言葉が途切れたりすることも多いです。ぼつりぼつりと語る話の間をつないでくれるのがお茶です。

ときにどんな言葉をかけたらいいか、困ってしまうような対話もありますから。沈黙を共に過ごすのも、大事な時間なのです」

三つ目の「偉大なるお節介」とはどのようなものか。がん患者に対して、家族や友人、仕事仲間などが良かれと思つて口にしたことが、患者本人を知らず知らずのうちに傷つけてしまっているケースは少なくない。元氣なときにごく普通に使っている励ましの言葉が、そのまま励ましとして相手に届かなくなるのが、

「とてもがんの闘病中には見えないね」「いつかこの経験がプラスになるよ」「身体のために少しでも食べて」「あきらめないで頑張れ」等々の言葉は、実は患

者からすると、勝手な気持ちを押し付けられているだけの「余計なお節介」と感じてしまうことが多々ある。

一方で、相手の気持ちに共感し、必要なことをサポートするのが「偉大なるお節介」だと樋野医師は言う。

「がん哲学外来の目的は、悩みの『解決』ではなく、『解消』にあります。悩みそのものは消えずに残っている

でも、その人の中で優先順位が下がれば、悩みを問わなくなる。それが『解消』です。それには、自分以外に意識を向ける必要がある。

だから対話がいいんです。病気の苦しい自分という狭い視野にある状態から一度外に出してあげると、

客観的な視点が備わります。マイナス思考からプラスの発想に変わること、

何かに気がついて対話中に涙を流す人もいます。それまで自分のことだけを考えていた人の中の優先順位が少し変わる。それが『がん

哲学外来』の貢献です」

訪ねて来るのは、様々なケースの悩みを抱えた人々だ。がんを告知されショック

クを受けた人、再発の不安を抱える人、がんになったことで家族や友人との関係に悩んでいる人、余命を宣告されて死への恐怖に苛まれている人、家族をがんで亡くした人……。実はがん以外にも、うつなど精神的に病んでしまった人や、職場や親族との人間関係に疲れてしまった人などさまざま

## 全国約七十カ所に広がる

こう語る樋野医師が、

「がん哲学外来」の着想を得たのは、二〇〇五年のこと。きっかけは順天堂大学に新設されたアスベスト・中皮腫外来での経験だった。

「僕は病理医ですから、普段は細胞を顕微鏡で診て研究や診断を行い、亡くなった方を病理解剖して死因を特定するのが仕事で、患者さんと接することはまずありません。それが、中皮腫という難治性のがんの診断マーカーを開発していた関係

で、新設外来を三カ月ほど手伝うことになりました。問診で、初めて患者さんやご家族の不安や苦しい胸の

まだ。年齢も十代から九十代までと幅広く、不登校の子供が親と一緒にやって来ることもあるという。

「ここは、がんの方に限らず、誰が来てもいいんです。『がん哲学』は、人間学です。『がん哲学』と付いていることで、男性も参加しやすい場所になっているのも良い点だと思います」

内を聞くうちに見えてきたのは、医療の現場と患者さんとの間にある隙間でした。それを埋めるには、同じ視線で語り合える対話の場があればいいと気づいた。それが『がん哲学外来』です」

スタートは〇八年。順天堂大学で三カ月限定の特別外来として無料で試験的に行ったところ、予想を上回る予約が殺到した。一日四組の枠を八組に増やしても、八十組以上のキャンセル待ちが出たという。その後、体がつらい患者が少しでも来やすいように活動の場を駅前の公共スペースに移すと、多くの賛同者を得

てNPO法人化。一三年には一般社団法人へと発展し、現在に至っている。「がん哲学外来」に参加した人たちが自主的に「メディカル・カフェ」という対話の場を開く体制もできた。「がん哲学外来」は、各地に広がり、現在は、全国約七十カ所にある（一般社団法人「がん哲学外来」のウェブサイトで確認できる）。日本発信の医療形態として、欧米から講演依頼や視察が来るなど、海外からも関心が高まっている。

創業天明元年  
(1781年)

京 都
石野の

# 白味噌



株式会社 石野味噌

京都府下京区油小路西条下北町井筒町 ☎(075) 361-2336  
http://www.ishinomiso.co.jp  
和歌い味噌は百選。資料品店にて

「メディカル・カフェ」を点在させる「メディカル・ヴィレッジ」も構想中だ。「この九年でここまで広がったことに驚いています。患者さんと話すのが苦手な病理医になったのに、人生は不思議です。しかし、『メディカル・カフェ』はまだ不足していて、人口一万五千人当たり一カ所は必要だと考えています。目標は国内にある教会と同じ全国七千カ所。近所により」と立ち寄れる対話の場ができれば、孤独や不安を抱えて家に籠もりがち患者さんの心の支えになります」

樋野医師の故郷・島根県出雲市大社町鶴峠や、群馬県の万座温泉では、末期がんの人たちの療養施設や

樋野医師の構想の実現は、闘病スタイルを変える可能性を秘めている。